

補論 4 北東部諸州

ブラフマプトラ河の川面に映る満月を 1987 年 10 月 30 日に見た。ガワハティ空港に着陸する直前のことであつた。税関を抜けようとしたところで、空港職員に呼び止められて、「お前の友人の日本人は入域できないので、お前も戻れ」と言われた。連れ戻されて、同じ飛行機でデリーに送還された。当時、アッサムはまだ入域許可を得ることができなかったのだが、なぜかエア・インディアの航空券は購入できてしまったのだった。航空券を売った方が悪いので、費用を返せと騒いだ。もちろん、それは返してもらえなかったが、そのかわりにお咎めもなかった。私の容貌はアッサムあたりに居住する人々に見えるので、空港では誰も気に留めなかったのだ。しかし、小林さんは典型的な日本人であつた。

今となつては、とても受ける笑い話だが、ロンドンのヒースロー空港第 4 ターミナルで、このような出来事があつた。カンタベリーのケント大学に滞在していた私を妻女が訪ねてくることになり、ターミナル出口の一番前で出迎えていた。ところが、彼女は私を識別できずに、空港で 1 時間ほど迷子になってしまった。なぜなら、このターミナルを利用しているのはインド亜大陸の人々が多く、私は出迎えの彼らになじんでいて、妻女にすら日本人として認識されなかったからである。

こうした事情で、ついにアッサムでの滞在は 1 時間ほど、空港の外には出られなかった。このために、この節項は、当時、将来の調査を期して、カルカッタ（現コルカタ）の書店などで収集した文献を中心に記述する。その後、アッサム関係の文献を探したが、国内外ともに、さほどの数の文献は見つけられなかった。1995 年以降、アッサム、メガラヤ、トリプラの 3 州は外国人も許可なしで旅行ができるようになったが、その他の 4 州は今も入域許可が必要なようである。

1) 北東部諸州の歴史概観

歴史概要：

インド亜大陸の北東部は古くから人間が住んでいた地域で、メガラヤには新石器時代の遺跡がある。もっとも古くから居住してきたと考えられるメガラヤ丘陵のカシ族やジャインティア族の祖先たちは、モン・クメール諸語に属する民族である。広域でみると、チャティスガヤ州やオリッサ州に住むムンダ諸語に属するムンダ族やサンタル族、ニコバル諸島の民族などは、オーストロ・アジア語族に加えられる。彼らは後に南下してきたチベット・ビルマ語系の民族によって分断されて、次第に平地から追われて、丘陵に孤立するようになったようだ。チベット・ビルマ語系の諸民族はチベットから中国雲南省にまで分布している大きな民族集団である。インド文化圏と中国文化圏の間の緩衝地帯に展開するチベット・ビルマ文化圏とも言われている。中尾佐助（1967）の提唱した照葉樹林文化の中核である東亜半月弧を包摂している。インド北東部にインド・アーリア系諸語を用いる民族が移入してきたのは約 2,000 年前と推定されている。

紀元前 1,500 年頃に、ユーラシア大陸内部で遊牧生活をおくっていた民族が南下して、

一方がイラン方向に、他方がヒンドゥクシュ山脈を越えて、パンジャーブ平原に至った。これがアーリア民族のインド侵入であり、さらに 1,500 年をもって、アーリアはアッサムに至り、アッサム人の祖先となった。アーリア人社会が牧畜・半遊牧から定住農耕社会へと移行することで、ガンジス河を越えた頃に、先住民から稲作を受容したのであろう。当時、ガンジス川流域の東部辺境のマガダ地方には、マガダ族やキラータ族が居住していた。紀元前 3 世紀にはマガダ国は北インドを統一したマウリア王朝になる。紀元前 184 年にマウリア王朝が滅亡すると、戦乱の時代になり、間もなく、バクトリアに残存していたギリシア人が西北インドに侵入してきた。その後も、シャカ族、バルティア族、クシャーナ族などの侵入が繰り返され、西から東へと人々の移動が続き、アッサム地域にもアーリア族が移住することになったのだろう。

3～4 世紀になるとアッサム西部にヒンドゥの小国ができるようになった。4 世紀にはカーマルーバ王国が出来て、7 世紀頃まで続き、その後小勢力が分立することになった。13 世紀にはイスラム勢力の侵攻を受けるようになった。この頃、アホム族が移住して、王国を築いた。河川の流域に居住して灌漑稲作を行った。

14～15 世紀には、小国が乱立し、その後 16～17 世紀にはムガル帝国と対峙することになった。1786 年にアホム王国に反乱が起こり、自力で鎮静できずに、イギリスに支援を求めたので、以後、イギリスやビルマの介入を受けることになった。1824 年のイギリス・ビルマ戦争の結果、1826 年にはヤンダホ条約によってアッサムはイギリスの支配下にはいることになった。イギリスはアッサムが茶の栽培に適していることから、茶園の開発を進めた。1857 年にスィパーヒー {注：セポイ} の乱の後に、東インド会社がその責任を取ってインド統治の任を解かれると、アッサムはイギリスの直轄となった（金井 2006）。

現代史：

アッサムの主要民族であったアホム族の王国は 13 世紀から 19 世紀初めまでこの地域を支配していたが、1826 年の英緬戦争後のヤンダホ条約によってイギリス領に組み込まれた。アホム族は北タイから侵入して来た仏教徒で、1228 年に王国をアッサム地域に築いた。ブラマプトラ川南岸に居住した彼らはヒンドゥ教徒に変わったが、高地アッサムの隔離された村々に居住する人々はシャン・タイ語を話し、仏教徒の習慣を維持している。

20 世紀初めのインド北東部には、イギリス直轄領の他、シッキム、ブータン、コーチビハール、ジャインティア、マニプル、トリプラなど 6 藩王国があった。1947 年にイギリスから独立して、インド共和国が成立した際に、ブータンとシッキムはインドの保護を受けるも独立国として残ったが、他の藩王国はインド共和国の西ベンガル州およびアッサム州に順次編入された。その後、1963 年にナガランドがアッサム州から分離、1972 年にはメガラヤ、マニプル、トリプラの 3 州が成立し、1975 年にシッキムはインドに併合されて州に位置づけられ、さらに 1987 年には連邦直轄領であったミゾラム、

アルナーチャール・プラデーシュが州に昇格した（金井 2006）。この地域は今でも多くの課題を抱えている。中印国境紛争、ナガランドの独立運動（多良 1998）、アッサムの反政府運動・ボド族の分離運動、バングラデシュからの難民流入などである。

Sengupta 編 (1994) による北東諸州の農業に関する記述のみを概観要約して次に記す。4 つの章の分担執筆者によって意見の相違はある。

インド憲法に基づいて北東部諸州 NEFA は第 6 次計画に含まれた。この計画では地域議会は行政的、法的および財政的事項に関して自治が認められ、条例づくりを促された。地域開発や保全を含めて多くの事項が挙げられている。その事項の一つに農業目的のための水の利用、焼畑や移動農耕を規制することもある。しかしながら、工業化以前、定住農耕以前および市場経済以前において、北東部諸州では自給的な焼畑が主要な暮らしを支えていた。1985 年において、北東部諸州における部族の人口比はアルナーチャール・プラデーシュ（約 70%）、アッサム（11%）、マニプル（約 29%）、メガラヤ（91%）、ミゾラム（94%）、ナガランド（84%）、トリプラ（約 44%）であった。1976 年における焼畑面積はアルナーチャール・プラデーシュ（24.8 万 ha）、アッサム（49.8 万 ha）、マニプル（10 万 ha）、メガラヤ（41.6 万 ha）、ミゾラム（60.4 万 ha）、ナガランド（60.8 万 ha）、トリプラ（22.1 万 ha）であった。これらの面積は州面積に対して、アルナーチャール・プラデーシュとマニプルは 3~4% で少なく、他の諸州は 18~37% に及んでいた。アルナーチャール・プラデーシュにおける焼畑の主要作物はイネであるが、雑穀、トウモロコシ、野菜も栽培されている。ただし、地域によってイネはほとんど栽培せず、主な穀物はトウモロコシとシコクビエである。移動農耕に関しては数年間の休閑後に同じ場所に戻る場合と戻らない場合がある。戻するためには土地の占有権が必要であり、戻らない場合に占有権はいらない。もちろん、アッサムの平地やテラス農耕では水田稲作が主に行われている。焼畑ではイネを主に、雑穀、トウモロコシ、野菜を栽培している。マニプルでは稲作が主になっている。メガラヤでは平地では水稻栽培が行われている。ミゾラムでは焼畑が規制されて定住農耕やテラス農耕が進められているが、まだ耕作可能地の 70% は焼畑に用いられている。ナガランドやトリプラでも定住化が進められているが、焼畑での栽培は多い。

トト族 Totos はインドとブータンの国境地帯に居住している。彼らはモンゴロイドで、文字はないが独自の言語を有している。1865 年以前はブータンの支配下にあった。かつてはオレンジ栽培で有名であった。ラックを生産して、イネ、塩、衣類と交換して暮らしていた。ワタも栽培していたが、今は購入している。定住農耕になって、主にトウモロコシ、シコクビエ marua、イネを自給用に栽培している。最近では、ジャガイモやショウガなども導入している。シコクビエは信仰や伝統的祭事におけるサケ eue 用として重要な作物である。6~7 月に栽培を始め、移植し、9~10 月に収穫する。イネは適当な土地がないので、トウモロコシやシコクビエよりも栽培は少ない。9~10 月に育苗して、移植し、1~2 月に収穫する。宗教行事 sarka はトウモロコシとシコクビエを収穫した後に行う。ここでシコクビエのサケは重要な役割をもっている。主神 Ispa に降雨を祈り、翌年のさらなる収穫を願うために用いられている。

北東部諸州は資源が豊かで、壮健な民族が居住しており、深く根差した文化がある。現在も移

動農耕が主要な生業である。しかし、焼畑は環境的に課題もあり、プランテーションで、チャ、ゴム、コーヒーおよび園芸作物を栽培できる可能性は高い。

移動農耕は北東部諸州の他、南オリッサや北アンドラ・プラデシュの丘陵地で広く行われている。また、マディヤ・プラデシュ、マハラシュトラ、ビハール、ケララ、タミル・ナドゥの隔離された地域でも焼畑 jhum は一般に行われている（注：インド各州における焼畑に依拠する地域社会に関して詳細な資料 1976 年が示されている）。アルナーチャル・プラデーシュのワンチョ族 Wanchos の年間農作業歴（1982 年）において雑穀栽培に関して見ると、1 月に耕地や種子の準備がなされ、2 月に播種される。5～6 月に除草、7～8 月に収穫され、また、10 月に耕地の準備がなされる。焼畑は 2～3 年使用し、8 年ほど休閑する。地域によって 6～10 年の場合もある。北東部諸州では最も主要な作物はイネであるが、これに続く作物はトウモロコシ、各種雑穀、マメ類、カラシ、ゴマ、サトウキビ、ワタ、ヤム、サツマイモ、トウガラシ、ショウガ、ウコン、パイナップルの他、各種果物や野菜がある。焼畑は長年の経験の蓄積によって進歩してきた。熱帯降雨林地域では植生の回復が早いので有効ではあるが、焼畑に依拠しない暮らしに向けて円滑に移行することは人々に納得されるに違いない。

地理概要：

アッサム地域の北にはヒマラヤ山脈、チベット高原が東西方向に位置し、東にはアラカン山脈、バトカイ山脈が南北に走っている（補図 4.1）。このためモンスーンの季節には山脈に堰き止められた湿った空気が滞り、世界でも最も降雨量が多くなる。これらの水の流入を受けて、ブラマプトラ河は世界的な大河の一つとなり、たびたび大洪水を引き起してきた（Discovery Channel 2004）。



補図 4.1 インド、アッサム地域の諸州と周辺国

主な民族分布：

インド北東部の諸州には多様な民族（種族）が混在して居住する。歴史的に見ると辺境ゆえに、インド、ビルマ、中国およびイギリスなどからの支配をおおよそ免れてきた。この地を統括するほどの王国は築かれなかった。民族（種族）、部族、そして近代以降の民族国家あるいは国民国家がいかなる実態を持っていたのか、これらの構造的な関連性をもって明らかにしたい〔注：補論 1、この間、憲法などを検討することによって、国家という訳語は家イエの用語法によって誤解を生じると考えるようになったので、本当は国、くにを、できれば王国、帝国や共和国などと規定して使いたい。〕。

多良（1998）は、この地域の主要民族について記しているので、補表 4.1 に整理してみた。北東部諸州の民族は大方がモンゴロイドでシノ・チベット語族だが、ネパールやバングラデシュはモンゴロイドとアーリア混合し、さらにドラヴィダも加わっている。メガラヤ州のカシ族とジャインティア族は特異的にオーストラロイド、オーストロアジア語族である。宗教的には、本来アニミズムであったが、次第に北からのチベット仏教や南からの仏教、さらに西からの影響でヒンドゥ化が続き、近代になってイギリスなどヨーロッパの植民地化の影響でナガ族、ミゾ族、カチン族、カシ族、ガロ族およびカレン族ではキリスト教化も進んできた。

補表 4.1 北東部の主な民族

民族名	居住地域	人種	言語	宗教
ナガ	ナガランド周辺	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	大半がバブエスト、キリスト教
アホム	アッサム州周辺	シャン族に近いがベンガルと同化進	タイ・ガダイ語族	ヒンドウ化進行
ボドノカチャリ	アッサム州平地部	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	ヒンドウ化進行
メイティ(マニプリ)	マニプル州の中央盆地	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	18世紀にヒンドウ化進行
クキ	マニプル、ナガランドおよびビルマ	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	ヒンドウ化進行
カチン(ジンポー)	ビルマのカチン州からアッサム州、アルナチャル・プラデシュ州、中国の雲南省	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	大半がバブエスト、キリスト教
ミゾ(ルシャイ)	ミゾラム州	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	プロテスタント、キリスト教が多い
カシノジャインティア	メガラヤ州中東部	オーストラロイド	オーストロ・アジア語族、モン・クメール語派	プロテスタント、キリスト教が大半
ガロ	メガラヤ州西部	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	ヒンドウ化、キリスト教化が見られる
モンパ	アルナチャル・プラデシュ州西部	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	チベット仏教あるいはボン教
アディ(アボル)	アルナチャル・プラデシュ州	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	アニミズム
ミシュミ	アルナチャル・プラデシュ州	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	アニミズム
トリプリ	トリプラ州	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	ヒンドウ化
レブチャ	シッキム州	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	チベット仏教
ベンガリー(バングラ、ベンガル)	ウエスト・ベンガルおよびバングラデシュほか	アーリア、ドラヴィダ、モンゴロイドが混合	インド・ヨーロッパ語族のベンガリー	ヒンドウ教およびイスラム教
ネパリー	ネパールほか	アーリア系、モンゴロイド系	インド・ヨーロッパ語族とシノ・チベット語族	ヒンドウ教からチベット仏教
チャクマ	バングラデシュのチッタゴン・ヒルおよびミゾラム州ほか	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	仏教徒が多い、ヒンドウ教徒もいる
ビルマ	ビルマ中央部・周辺	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	仏教徒が大半
カレン	ビルマ東部および南部のタイ国境付近	モンゴロイド	シノ・チベット語族、カレン語派	大半がバブエスト、キリスト教
シャン	ビルマ北東部のシャン州ほか		タイ・ガダイ語族	大半が仏教徒
チン	ビルマのチン州	モンゴロイド	シノ・チベット語族、チベット・ビルマ語派	少数がキリスト教化

多良（1998）から整理

2) アッサム州

アッサム低地はブラマプトラ河（ブラフマ神の息子の意）に沿って位置し、熱帯気候である。面積は78,438 km²、人口は約26,60万人である。主要都市ガワハティの標高は60mほどで、蒸し暑い。アッサムには美しい自然と栽培条件に恵まれて茶のプランテーションが多い。広義のアッサム地域は中国、ミャンマー、バングラデシュに国境を接し、

アッサム州は2つの直轄領と5州に囲まれた平野部にあった。周囲の5州は山地帯にあり、多様な民族が居住している。

アッサムの人々は大らかで、地域の居住者はアーリアンとモンゴリアンが程よく混合している。アホム族 Ahoms が 13～19 世紀にビルマ人に負かされるまでは、アッサムを支配していたのはシャン族である。この時代にムガールはアッサムを侵略できなかった。ビルマによる侵略の数年後に、イギリスの東インド会社がビルマ王からこの地を受け取った。インドの独立後に、パキスタン、バングラデシュの一部にされたが、その後、個別の州に分離した。今日、アッサムはブラマプトラ川の平地部に位置している。

主要民族はアッサミー Assamis であるが、1947 年のインド・パキスタン分離以降、ベンガルからおびたしい数の移民があった。インド各地や、チャッティースガル州やジャールカンド州からも茶園労働者としてムンダ族やサンタル族が移住してきている。ガワハティにはネパール人も多い。ブラマプトラ河北岸にはボド族、南岸のメガラヤ州境付近にはハジョン族、ブータン国境にはブティア族、中央部にはラバ族、ラルン（ティワ）族、東部にはタイ系のアホム族、北東奥地にはミシン（ミリ）族、デオリ族、カムティ族、さらに中央部から南部にかけてカチャリ族、カリビ族、ディマサ族など多様な諸民族が居住している。主要言語はアッサム語だが、各諸族の言語があり、英語が共通語になっている。アッサム語はベンガル語に近く、マガディ語の影響下にあるその支脈という。インド・アーリア系の言語である。ただし、アホム族の言語はビルマのシャン族の言語に近く、カムティ族もタイ系の言語だが、ともに衰退の危機にある（金井 2006）。

アホム族を含めて、大方は 15～16 世紀ころまでにヒンドゥ教徒化した。カムティ族は上座部仏教徒である。ベンガルから移入した人々はムスリムが多い。この他にキリスト教改宗者やシク教徒もいる。先住民であるアッサミーと、その後 1947 年に移入したベンガルのヒンドゥ教徒、さらにバングラデシュからのムスリム移民との間の民族的な軋轢が問題になっている。1980 から 1990 年代にかけて学生やボド族武装組織による活動があったので、アッサムに観光客は入域困難であった。現在は、観光客に入域が開放されている。

アッサム州は 1970 年代には農業が主要産業で生産収入の約 58%、主要作物のイネは穀物栽培面積の 96% を占めていた。雑穀栽培はほとんど行われていないようだ。他の換金作物にはチャ、サトウキビ、ジュート、カラシ種子およびタバコなどがあり、全栽培面積の 18% であった（Das 1983）。ブラマプトラ河の中にあるマジュウリ島では洪水を利用して無施肥により、イネの二期作が行われている。食べ物は、基本的な、メシ、ダル、サブジ、魚カレーなどの他に、モモ（チベット料理）、ドーサやイドリ（南インド料理）などもあるようだ。

3) アルナーチャール・プラデーシュ州

ヒマラヤ南麓のアルナーチャール・プラデーシュはアッサムの北に位置し、ブータン、中国およびミャンマーに国境を接している。気候は標高によって著しい多雨（年

5,000mm以上)で高温多湿の亜熱帯、ヒマラヤ山麓の涼しい温帯、および高山帯へと変化する。人々は主に300~1200mに居住しているが、最高峰はナムチェ・バーワ峰(7,756m)である。森林面積は約61%で、山麓や平地は常緑から半常緑林、温帯林、竹林、混合林がある。森林は、建材、薪炭、香辛料や薬草などの採取の場所として利用されている。

面積は83,743 km²、人口は1961年のセンサスでは336,558人、その後も漸増して1971年には467,522人、1981年に631,839人、1991年に858,392人であった。緑濃い森林地帯で、溪谷が入り組んでいる。照葉樹林帯、夏緑樹林帯、針葉樹林帯を経て、森林限界4,000m以上には高山植物が分布しており、動植物相に恵まれゾウやトラほか多くの野生動物、ランについては550種以上が生育している。

住民は26民族(部族)、82の異なったグループに区分される{注:22~24、細分すれば51民族との意見もある。}。主な指定部族はモンパ Monpa、アパタニ Apatani、ダフラ Dafla、タギン Tagin、ガロン Galong、シェルドゥクペン Sherdukpen、アディ Adi、パダム Padam、カムティ Khampti、ムシュミ Mushmi、ワンチョ Wanchho などである。カムティ族とジンポー族は200年ほど前にビルマから移住してきた。少数のリス族は最も新しい住民である。大方の言語はシナ・チベット語族で、チベット仏教を信仰している。カムティ族はアホム族と同じくタイ諸語を用い、上座部仏教を信仰している。固有の文化を有しながら、近代化を進めている。主要な職業は伝統的な焼畑による農耕と園芸、林業である。

Gopalakrishnan (1994) は20主要グループ、110小グループともいう。考古学的な証拠はほとんどないが、祖先はモンゴロイド、古モンゴロイドあるいは原モンゴロイドとも言われている。彼らは採集民であったが、長い時間を経て焼畑農耕をするようになった。マハーバラタの時代の神話や伝説は多くある。この地域の歴史はアホム族、チベットのラマ教、イギリス支配からの記録はある。ブラマプトラ河谷においては10世紀頃に芸術文化は形成されていた。アホム族支配地の東の辺境には数多くの山地民が居住していたが、長らく国境紛争も続き、隔離状態にあった。

農耕文化複合:

Gopalakrishnan (1994) による概説によれば、アルナーチャール・プラデーシュにおける農耕は重要な経済活動である。人口の92%は田舎に居住し、95%は指定部族民である。64%が森林であるので、農耕地面積は54,637haにすぎない。焼畑面積は年間700 km²であった。焼畑は環境的に悪い点があり、すなわち森林破壊、土壌浸食、低生産性である。このため、州政府は定着的な農耕、テラスでの水稻栽培、土壌保全、灌漑、などを勧めている。また、穀物栽培、茶とコーヒーのプランテーション導入のプロジェクトおよびアグロフォレストリーのプロジェクトを進めている。

焼畑の栽培体系は次のとおりである。カリフ季には、1年目にトウモロコシ、ヤムイモ、野菜、ジャガイモ、パパイヤの他、イネ、雑穀 millets、マメ、2年目にはイネを栽培する。ラビ季には早生イネ、雑穀、野菜を栽培する。1年目は収量が良いが2年目

では衰える。最近では肥料や高収性品種を導入することもある。休閑期間は3～10年である。

作付体系は耕地の傾斜、標高、気候などによって地域によって多様である。たとえば、西部の Kameng では、高地ではオオムギ、コムギ、トウモロコシ、雑穀、大豆が主作物である。他方、丘陵地ではトウモロコシ、雑穀、イネが主な作物である。補表 4.2 に穀物栽培（1988～1989）についてまとめた。イネは約 12 万 ha で約 13 万トン、トウモロコシは約 3 万 ha で 4 万トン、コムギは 4 千 ha 弱で約 4.5 千トン、雑穀類は約 2 万 ha で 1.7 万トンであった。ここで示されている雑穀が何なのか個別の種名は記載されていない。雑穀は州内各地で栽培されているが、ソバは限定的のようだ。水稻は 5・6 月～11・12 月および 3・4 月～9 月に 2 栽培シーズンがある。コムギは比較的最近の作物で、1960 年代に農業計画によって導入された。雑穀はすべての地区で栽培されており、ビール醸造の他、ブタとニワトリの濃厚飼料のために生産している。

補表 4.2 アルナーチャール・プラデーシュの穀物栽培（1988～89 年）

	イネ	トウモロコシ	コムギ	雑穀類
栽培面積 ha	121,045	32,273	3,684	19,862
生産量 トン	135,821	40,234	4,508	16,941
収量 トン/ha	1.12	1.26	1.22	0.83

この他に、マメ類や野菜類、リンゴ、モモやアズキ、グアヴァ、オレンジ、バナナやパパイヤなどの果物も栽培されている（Gopalakrishnan 1994）。

水野（2006）によるディラン地方の調査によれば、標高に沿った農耕の実態は次のとおりである。イエワン村は標高 1,700m にあり、ここではトウモロコシ（6 月～11 月）、シコクビエ、水稻およびオオムギを栽培している。オオムギはトウモロコシの裏作である。化学肥料は雑草を繁茂させるので、落葉や家畜の糞による有機農法に戻っている。

バルチ村は標高 2,000m に位置し、トウモロコシ（4 月～9 月）、ソバ（8 月～12 月）、シコクビエ、および陸稲を栽培している。トウモロコシの裏作はソバになる。

カゴカツア村は標高 2,300m で、かつては焼畑が多かったが、今は残存しているのみである。トウモロコシ（5 月～10 月）の他はあまり栽培されない。ソバ（9 月～11 月）は落葉とトウモロコシの茎葉を施肥するので、一部でしか栽培されていない。ソバは灰色の品種 gruntsun および早生ダッタンソバ brashum がある。ダッタンソバは病人や妊産婦の滋養のためにボクペ bokpai（オネリ）を調理する目的で栽培されている。

水稻は 1,500m ほどの比較的低位地で 4 月から 11 月にかけて栽培されている。通常はパンジャブ米を食べているが、祭事や来客用に粘り気のある赤米も栽培している。この赤米は、mondep、khutsalu、あるいは rachalu などと呼称されている。

栽培されている穀物の呼称を補表 4.3 に示した。イネについては、素材、加工、調理の段階で呼称が変化していると思われる。これらの呼称はインド亜大陸の他地域の呼称

とは大いに異なり、連続性がないので、呼称から言語的に伝播を推測することは今のところ困難のようだ。現在は、街に近い所では換金作物のトウガラシ、トマト、ジャガイモ、リンゴなどの栽培が多くなり、穀類の栽培は減少傾向にある。

補表 4.3 栽培穀物の呼称

穀物名	民族名	呼称
イネ	タワンモンパ	nu, nun
	ディランモンパ	ra, raha
	カラクタンモンパ	pa, bara
コメ	タワンモンパ	dep, depu
	ディランモンパ	khu (bre)
メシ	タワンモンパ	toh, topcha
	ディランモンパ	tochang, toshang
	(リス)	hoi
トウモロコシ	タワンモンパ	oshum, boma
	ディランモンパ	phinag, phinthang
シコクビエ	タワンモンパ	kowp, khra
	ディランモンパ	khongpu, kongpu,
ソバ	タワンモンパ	kyabu
	ディランモンパ	gruntsun
オオムギ	ディランモンパ	ボン
	カラクタンモンパ	ボン

(水野 2012 から作表)

他の民族の概要を見ると (Gopalakrishnan 1994)、Banguis、Mijis、Akas、Sherdukpens、Khowas、Bangros、Taguis などもおおかたは焼畑耕作をしている。Apatanis は灌漑による農耕、Hill Miris は定着した農耕を行っている。1947 年にアッサム州政府によって公布された焼畑地規制法は先住民の土地に対して慣行的な権利を与えている。アッサムの平地では水田稲作をし、丘陵地では焼畑耕作を行っている (Das 1987)。

食文化：

アッサムでも一般にはイネ米が主食メシで、いわゆるカレー、ダル、サブジ、パロタ、トゥクパ (チベット料理) などを調理している。ソバはうどん状 gruntsun phutang にして、ヤク肉のスープで食べている。モモもヤクの肉を包んで作る。チャオメン (焼きソバ) や納豆 (lebechora, lebegpen) もある。ディラン地方では牧畜民からチーズ chura を買って、メシの味つけに用いているが、アッサムの人々の一般的な調理ではないようだ。

穀物粉を熱湯で練ったオネリを、ディランモンパではボクペ bokpai、タワンモンパではツァン (サン) tsan と呼んでいる。したがって、トウモロコシの場合は phinthang bokpai、シコクビエの場合は ramphong bokpai, kongpu bokpai、ソバの場合は gruntsun bokpai と呼び、よく食べる。オオムギやハダカムギを炒って粉にした食品をツァンパ

tsampa または pai と呼び、間食によく食べる。オオムギは神に捧げるトルマを作ることにより用いられる。農耕民はバター茶、紅茶、ミルク茶を飲むが、牧畜民はバター茶のスジャーshuja を飲む。

ディラン地方のサケ yu は、トウモロコシ fine thang yu、シコクビエ kongpu yu、オオムギ・シコクビエ混合 bong kongpu yu、およびイネ khu yu などが醸造され、販売もされている。タワン地方ではサケを chang、蒸留酒を ara と呼んでおり、これはネパールでの呼称と同じである。また、アルコール飲料アポン apong はどこでも自家醸造されているようだ (Discovery Channel 2004、金井 2006、水野 2012)。

4) メガラヤ州

アッサムの南に位置するメガラヤ州は丘陵部の人々の念願でアッサム州から 1970 年に分かれ、1972 年に州になった。面積は 22,429 km²、人口は約 230 万人である。主要都市シロンは標高 1,500m ほどの丘陵地帯にある。シロンの南 58 km に位置するチェーラープンジーは標高 1,300m で、世界一の年間降雨量 11,630mm を示した。丘陵地帯であるので、冬は霧が多い (Gopalakrishanan 1995)。

伝統的な焼畑 jhum が湿潤熱帯地域で、溪谷に沿って行われてきた。今日のテラス農耕地は 20~40 度の傾斜があり、長らく農耕は生態的・経済的要因により行われてこなかった。土壌はラテライト起源の赤い砂質ロームである。気候は、5~9 月は雨季で高湿度、年間降雨量 2,200mm の 80% はこの季節に降り、穏やかな冬が 11~2 月である。焼畑面積はガロ族では 1~1.5ha、カシ族では 2~2.5ha、家族構成はそれぞれ平均 8 人および 6 人である。11 月から 12 月に森林を伐採し、乾燥させ、翌 3 月に焼く。モンスーンの降雨があったら、8~13 種の作物を混合播種する。長期の焼畑サイクルでは穀類、短期の焼畑サイクルでは多年生のイモ類が重要である。収穫は連続的に行うが、1 年後には休閑してしまう。過去の休耕期間は 30~40 年であったが、最近では 5~10 年にまで短縮している。このような期間の短縮には生態学的な影響がある。メガラヤ州において焼畑に従事する人口は 1971 年には約 35%、その後漸減して 1991 年のセンサスでは約 19% (男女ほぼ同比率で) になっていた。これはインド政府の農業改良プロジェクトによりテラスでの農業生産が焼畑での生産よりも 4~5 倍多くなったからであろう。しかし、伝統的な農耕方法も維持されており、家畜を飼養し、狩猟・採集も食材源として暮らしに役立っている。丘陵地域であるので、土地の認識は非常に丹念であり、それぞれの耕作地に適するように、主にカリフ季に複雑な作付体系が行われている。

第 1 章で記したライシャン *Raishan* (*Digitaria cruciata* (Nees) A. Camus) はメヒシバ属で、アッサムのカーシーヒルに居住する山地民によってトウモロコシや野菜畑の 2 次作物として栽培化された一年生草本である。この地域のみで栽培されている。メシ (パート) などに調理されるが、飼料としての価値も高い。栽培化されたのはごく新しく 19 世紀後半とされている (Singh and Alora 1972)。残念ながらカーシーヒルへの入域ができなかったため、ライシャンを直接観察してはいない。雑穀は Millet とのみ記

載されており明確な記述はないが、大方はシコクビエであろう。1988～89 年の雑穀栽培はメガラヤ州で約 2,500ha あり、重要な作物であった。新品種が導入され、カーシー丘陵では斜面で混合栽培され、180 トンの収穫であった。ガロ丘陵では 2,000ha で栽培され、1,000 トンの収穫であった。ジェインティア丘陵にも最近導入されたが、200ha で 100 トンの収穫であった。1989 年から 1992 年までの穀物栽培面積の推移を見ると、イネは 104,400ha (収量 116,700～121,070 トン)、コムギは 4,600ha (5,900～5,550 トン)、トウモロコシは 18,500ha (23,400～23,810 トン)、その他の穀物は 3,110ha (2,600～2,460 トン)、それぞれこの値前後で安定的であった。

非常に古い新石器時代 (7,000B.C.) に移住してきた 3 つのアドヴァシー・グループが居住している。ガロ族 Garos は西部、カシ族 Khasis は中央部、ジェインティア族 Jaintias は東部に居住する (ブルーガイド海外版出版部 1993、Discovery Channel 2004)。ガロ族はチベット民族、カシ族はビルマ (現ミャンマー) のシャン族に関わるモン・クメール民族で、オーストロ・アジア系言語を用いている。

一般にはジェインティア族 (プナル族 Pnars) はカシ族に近いグループである。これらガロ族を含む 3 グループの人々は母系制社会であるが、大方の人々は 19 世紀にキリスト教に改宗した。それでも、古い伝統的な儀式、特に収穫を祝うダンスなどはよく残している。カシ族の信仰では、守護精霊はあらゆるところに存在し、顕現せず、特別な形で敬慕されてない。寺院、すなわち特別な儀式のための祈りの場所もない。

カシ族とジェインティア族はさらに 5 部族に分類される。Khyntiam Khasi (upland Kashi)、Jaintia (Synteng あるいは Pnar)、Bhoi、Lynngam および War Khasi である。Gupta (1984) は War Khasi の調査を丹念にしている。彼らは主に園芸に従事していて、素晴らしい果樹・菜園を造っている。一方で、森林を焼いて開墾し、新しく水田も造成している。オレンジ、パイナップル、マンゴ、ジャックフルーツなどの果樹やジャガイモ、ショウガ、ウコンなどの香辛料を栽培している。主食はイネである。朝と夜の 2 食制であるが、その間にお茶を飲み、チュラやビスケットなどで間食をしている。メシは、カレー、野菜、マメ類は同じ皿に盛って食べる。イネや雑穀で発酵させ、蒸留したサケ Ka Kiad を飲んでいる。

中根 (1959) はガロ族に関して次のような観察を記している。

ゾウはガロたちの作る主要食糧のヤムヤタロを好んで食べる。ゾウの大群が一夜のうちに部落の収穫をみんな根こそぎ食べてしまつて飢饉となつて部落が全滅した話も時々聞いた。イネなどは食べないがイモ畑に出没すると、収穫ができない。ガロの焼畑耕作は 1 年ごとにジャングルを切り開く。12～1 月に密林を伐採し、乾燥させ、3 月末に焼く。4 月初めの雨で、灰が土壌になじむ。ここに、イネ (米)、アワ (粟)、ワタ、トウガラシなどの種をまき散らす。鳥が啄むとちょうど間引きになる。根菜 (球根類) だけはオノで植える。収穫は上手くいけば 2 年分くらいの食糧が採れる。毎年耕作地を移動し 10 数年後にもとの所に戻る。このため広大な土地が必要であり、森林は村の所有地となっている。生産と消費は各家族単位である。

しかしながら、Maikhuri and Gangwar(1992)によれば、近年、伝統的な価値、文化、動植物の利用が失われてきた結果、急速な文化変容が進んでいる。メガラヤ州におけるカシ族やガロ族は丘陵地の良い小川のある窪地に集落を形成している。タケや木材で住居は建てられ、周囲にはキッチン・ガーデンがあり、小規模農家が多く、イネ、トウモロコシ、ジャガイモの他、トウガラシ、カボチャなどの野菜や柑橘やパイナップルなどの果樹を栽培し、野生からも採集して食材は自給している。余剰はマーケットで売っている。シロンのバザールでは、肉、野菜、果物、イネ米、マメ、オレンジ、ビンロウ、などを売っている。食べ物は、ターリでメシ、サブジ、魚やマトンカレーが一般的である。金井（2006）によれば、納豆（テュロンバイ）はバナナの葉に包んで市場でよく売られている。納豆はすりおろした青唐辛子と混ぜて、メシに添えて食べる。シッキムの納豆より発酵が進んでいるようだ。ターリはメシ、サブジ、ダルを基本に、魚、マトンおよび鶏のカレーを加える。イネは長粒と短粒の中間的な品種である。タケノコはよく食べられており、さらにタケは籠や漁撈具、建材にも活用されている。カシ族は豚のすべての部位を食材に煮込み料理にして、メシにかけてよく食べている。プーリ、モモやエビのパコラもある。

5) ナガランド州

ナガランドは南北に走るパトカイ山脈の丘陵・山岳地帯にあり（1,000～3,000m）、日本西部や韓国南部と共通する照葉樹林、低地は亜熱帯林の植生をもつ。複雑に溪谷が刻まれており、雨や霧が多く、温暖湿潤である。ここには暑熱の平地の暮らしを嫌い、山棲生活をする民族による生活文化が発達したと中尾（1967）はいう。この照葉樹文化は第一の野生採集段階、第二の半栽培段階、第三の根菜栽培段階、第四の雑穀栽培段階を経て、第五に水稻栽培段階に至った。すでに、第三段階ブッシュ・ファローでは焼畑耕作をとらない、今日もナガ族に属す Konyak 族はこの技能を伝えているようだ。第四段階は西方からの高文化の影響下に成立し、北方へと伝播した。ネパールやシッキムではすでに焼畑をしなくなったが、シッキムのレプチャ族やナガヒルから中国の雲南省にかけて多数の山棲民族がおり、焼畑耕作を行っていた。朝鮮や日本にかすかに残る焼畑もこの文化の影響によるものである。

ナガランドではシノーチベット語族、チベット・ビルマ語派、ボドーナガ語群の多様な 20 以上の地方語が用いられている。ナガ族と総称されている 14 以上の部族がおおよそ 300 万人居住し、英語が公用語である。主要なグループはアオ Aos、アングミ Angamis、コニャク Konyaks である。他に、セマ、ロタ、レングマ、キアムンガン、ゼリアンロン、チャケサン、サンタム、ポム、チャン、ポチュリ、イムチェンゲル、マニプル州にはタンクル、リアンメイ、マオ、マリン、カブイ、アルナチャール・プラデーシュ州にはワンチョ、ノクテ、タンサ、さらにビルマ（ミャンマー）にはパンメイ、ヘミなどの諸部族が分布している。

ナガ族に関する古代の明確な記録はない。旧石器から中石器時代にチベットあるいは

ビルマ方面から移住してきたと推論されている。伝説によると、ナガ族の祖先は特殊な石から生まれてきたと言うが、耕作地を求めて移動してきたので、いつから定着になったのかは定かではない。

チベット系のカチャリ族 Cacharis はかつてヒンドウ王国を Dimapur に築き、アッサムやビルマを襲撃していた。アッサムのアホム族が 17 世紀末にカチャリ族を配下に置くようになったが、1816 年にビルマがアッサムを侵略するとすぐに、平地へのナガ族の襲撃が再び始まった。1832 年にイギリスはアッサムとマニプルを繋ぐ道路を完成させ、ナガ族に出会った。数年間、イギリスはナガ族を支配しようと、襲撃に応報征伐を行っていたが、三次にわたる英緬戦争（1824、1852、1885 年）やセポイの反乱（1857 年）などが続き、ナガランドへの支配力が低下した。1873 年にインナー・ライン規則を設定して、イギリス・インドから以外の入域を制限した。1875 年にアンガミ族が中心となり連合して、1879 年にコヒマのイギリス前哨部隊を数カ月間にわたって包囲攻撃した。ナガ族は抵抗を継続したが、降伏して、1889 年にやっと永続的な平和に至った（多良 1998、井上 2008）。

第 2 次世界大戦中 1942 年には日本軍はビルマに大半を占領し、1943 年にビルマをイギリスから独立させた。また、S. C. ボースは首席としてシンガポールで自由インド臨時政府を樹立した。第 3 章補論で記したように、日本軍はアンダマン・ニコバル諸島を占領して、これをインド臨時（亡命）政府に提供した。1944 年には日本軍とインド国民軍はインパール作戦によってコヒマのイギリス軍を攻撃した。この地は日本軍が攻撃した最西地域になる。日本軍に対する戦争において、ナガ族は部族間で対応が異なり、イギリス軍あるいは日本軍に協力する部族に分かれた。インド独立後もナガ族の分離運動は続いたが、1963 年にナガランド州に位置づけられ、1975 年にナガの指導者はインド憲法を受け入れた。民族とか国という社会形態に属しているという意識がなかったもので、今でも国に帰属することに抵抗があるようだ。また元来、ナガ族はアニミズム信仰で、シャーマンによる祭祀を重視しており、土地なし農民はおらず、ヒンドウ教化を受け入れる信仰の様態にはなかった（多良 1998）。

第 28 回ゾミア研究会（2017）において、ナガ族に関する最近の研究発表があったので聴講し、その要旨を次に記す。

小磯学は、民族集団アンガミ・ナガ（インド北東部ナガランド州）の祭りとアイデンティティについて次のように報告した。民族集団ナガはインド北東部のナガランド州とその周辺地域（全体で四国ほどの面積）に約 200 万人が暮らす。一部では 1960 年代まで首狩りをし合うなど敵対関係にあった約 70 の諸集団から構成され、各々言葉、衣装、装身具、祭りなどが異なり、それぞれが別個の集団としてのアイデンティティを保持している。歴史的には、19 世紀以降イギリス軍の侵攻が外部世界を意識する端緒となる一方、アメリカの宣教師の活動によって急速にキリスト教への改宗が進んだ（今日では 97% がキリスト教徒、3% が古来の精霊崇拜）。さらに 20 世紀半ば以降にはインドや（当時の）ビルマの中央政府に対する独立運動が活発化し、「他者」に

対しての諸集団全体を「ナガ」として統一視する意識が芽生え今日に至っている。

今日、老若男女ともに彼らの多くは熱心なキリスト教徒である。しかし同時に、かつて（そして限定的には今も）教会が「未開」として否定した伝統衣装や装身具、祭りを頑なに守っていてもいる。それが帰属する集団の、そしてナガとしてのアイデンティティを強化する役割を担っているのは当然としても、キリスト教徒としても矛盾なく受け継がれている。

遠藤 仁は物質文化から見たインド北東部の社会変容について報告した。インド北東部に居住する民族集団ナガを対象にキリスト教化や第二次世界大戦、近代化という大きな社会変容を伴う事象に際し、彼らの社会がどのように変化してきたのか、その一端を物質文化、特に装身具から読み解いた。インド北東部の急峻な山岳地帯、いわゆる「僻地」と呼ばれる領域に、州境や印緬間国境に分断され居住しているナガは、これまで大きな社会変容の波に幾度も見舞われている。しかし、平野部に比べ、その生業体系の根本や道具等は急激には変化せず、比較的伝統的な生業や道具を今でも見ることができる。一方で、装身具に眼を向けるとキリスト教化による価値観の大きな変化や、第二次世界大戦やその後インドからの独立運動による戦火に見舞われたことによる喪失、近代化による価値観の変化など、装身具のもつ意味は大きく変容している。互いに意思疎通が不可能なほど細分化された複数の言語集団で構成された、民族集団ナガは元来アイデンティティを共有する集団ではなかったが、近年では「ナガ」としてまとまる動きが顕著であり、その際にも装身具が象徴の一つとして利用されている。

渡邊三津子はインド北東部ナガ丘陵における集落分布および土地利用の変遷について報告した。インド北東部とミャンマー北部に跨る峻険な山岳地帯（ナガ丘陵）に居住する民族集団ナガの人々は、山の尾根に集落を築き、焼畑による畑作や陸稲、水稻農耕を営み、狩猟や採集の比重も高い。また、家禽や家畜（ブタ）も飼育しており、半家畜といえるミタンニ牛を森林で放し飼いにしているという点も彼らの特徴となっている。しかしながら、キリスト教化や近代化の波の中で、彼らの生活や文化は大きく変化してきた。本報告では、人口増加の影響を受けて変化するナガの集落分布やその周辺の土地利用に焦点を当てる。1901 年以降の統計データを見ると、ナガランド州の人口は 1951 年から 2001 年の間に 19 倍に増加した。急激な人口増加は土地利用の過密化を招き、斜面崩壊や地滑りが多発して社会問題となっているが、実際、増加する人口はどのように集落に吸収されてきたのだろうか。Mimi、Khonoma 村を取り上げ、Corona 衛星写真（1960 年代）、Pleiades 衛星画像（2014 年）を比較判読し、集落分布や周辺の土地利用にみられる地域性やその変化を紹介するとともに、それらに影響を及ぼす地形的な要因について考察した。

農耕文化：

ナガ族の主な生業は農耕である。焼畑で陸稲、雑穀、トウモロコシ、ワタ、油料種子、トウガラシ、タロイモ、ヤムイモおよびマメ類を栽培している。焼畑は場所選びに始まる。10～15 年の密林を伐採して、乾燥させ、燃やして灰にする。耕して灰を土壤に混ぜ、適期に種子を散播する。畝は平行に作り、焼残りの木の幹は土壤流出を防ぐために残す。雑草や木の萌芽は頻繁に除去し、鳥獣害を防ぐように監視する。また、集約的な棚田での水稻栽培も行ってきた。農民による長年の努力と伝統的土木技術によってでき

上ったものである (Shimmi 1988)。

日本人によるナガランド州周辺地域の調査は第二次世界大戦以降の 70 年間にも、まれに行われていた。雑穀栽培についての記述を中心に要約引用する。

中根 (1959) による 1954 年のアッサム地域調査での観察を次に要約するが、農耕についての記述は少ない。ナガたちは急勾配の地に焼畑耕作の畠を作る。食事は玄米のご飯、トウガラシの豚汁、イネ (お米) からどぶろくのようなサケ (酒) を作る。コヒマはインパール作戦 (1944) の激戦地で、ビルマを経てやってきた日本軍はこの地で全滅した。津田正澄さんほか少数が九死に一生を得た。英軍の墓地、戦没者の記念塔は美しく造られ、「あなた方が故国に帰ったときには、故国の人々の明日のために戦って死んだ私たちのことを伝えてくれ」と刻まれていた。日本軍の墓地は丘にある刑務所の裏のジャングルで、放置されたままであった。ナガの人たちが日本兵の遺骸を集めて、埋葬したのだ。日本兵は軍律厳しく勇敢であったが、村人に危害を加えることはなかった。ただし、飢餓に苦しみ、食料は奪い取った。日本兵はワラビやタロ (里芋) が好きだった。

ナガ族の栽培する雑穀にはハトムギがある。森田 (1984) はナガ族の農耕についての観察を次のように述べている。セマ地方ではアコムという棒杵で、イネ、アワ、ヒエ (シコクビエのことか?)、トウモロコシを搗精していた。キアムンガン族のタンニョキン村ではハトムギのメシを食べていた。ハトムギからはテンというサケを醸す。チャン族のテンサン村ではイギリス人が侵入するまでは、焼畑でハトムギとアワを栽培していて、イネは知らなかった。村祭りではハトムギの生育 (8 月) および収穫 (1 月)、アワ播種後の豊作祈願 (2 月) および収穫 (6 月) の祭事がある。ここではハトムギからイーと呼ぶサケを造っていた。メルルのポチェリ族の村にはイネやハトムギが干してあった。

ハトムギ *C. lacryma-jobi* susp. *ma-yuen* はウビ農耕 (根菜農耕文化) の最終段階で栽培化された穀物である (中尾 1967)。本来、祖先種のジュズダマと同じく多年生草本であるが、一年生として栽培されている。包鞘は爪で割れるほど薄く、種子デンプンはモチ性である。今でも、インドやタイ、マレーシア一帯から日本まで栽培されている。なかでも、主要な食材としているのはアッサムのナガ族、中国広東省、広西省の傜族などであり、多くはない。日本で最近栽培が増加したのは、ハトムギが湿地を好むために水稲減反対策の代替作物として、および漢方薬・サプリメントやハトムギ茶などとしての利用である。一方、ジュズダマ *C. lacryma-jobi* susp. *lacryma-jobi* は首飾りや念珠、お手玉として今でも用いられており、レリクト・クロップとも考えられている。湿地の多年生雑草として生育し、アジア地域に広く分布している。種子デンプンはウルチ性である。ハトムギとジュズダマは容易に雑種をつくる (Kimata and Nakagome 1982)。アッサムからビハールにかけて、ジュズダマ属 *C. aquatica* や *C. gigantea* が水田雑草として生育分布している (Bor 1960)。

高野 (2009) は西南シルクロードを求めて、中国からビルマ (ミャンマー) を経て、

ナガランド州に入り、アルナーチャール・プラデーシュを經由し、カルカッタに至る旅行をした。農耕に関する記述を次に要約する。ダルはカムティとタナイの中間にあり、交通の要衝で、第二次世界大戦中は日本軍が常駐して、茶畑を現地人に作らせた。チンドウィン川沿いはフーコン平野と呼ばれ、日本軍と連合軍が激戦を行った場所である。ナガ山地のラヌ村では一年を通してイネ {米} が食えない。ここではトウモロコシ、アワまたはヒエ {注：これはシコクビエのことだろう}、イネの順番で畑を耕す。ヤムイモは栽培と野生とともに一年中食べる。かつてはブタ、ウシ、ニワトリ、スイギュウ、ウマ、ロバなどをたくさん飼っていたが、1975 年にビルマ軍に村を焼き討ちされてからは飼わなくなった。トウ・ロン村では竹の盃にはいったサケ（カチン族のサビと同じもの）、メシ（赤いもち米）、野ヤギの肉を食べた。ナガ族の焼畑は、雑草もなくきちんと整備され、ヤムイモ、イネ、トウモロコシを混作していた。アッサム州に入ると平坦地に茶畑が並んでいた。

食文化：

ナガ族はイネを主食としているが、雑穀やオオムギも食べている。ベジタリアンではなく、食物に禁忌はないので、農耕、狩猟、採集で得たものを食材に用いている。調理方法は基本的に煮ることである。水と調味料（魚の干物の出汁）で煮たものをカレーと称しているが、香辛料マサラを多用してはいない。アルコールにも禁忌はなかったので、主にイネを材料にズトーと呼ぶサケを造る。雑穀やトウモロコシからもサケを醸造してきた。キリスト教が普及して、飲酒の習慣は減少した。現在禁酒法があり酒は販売されていないが、自家醸造は行われている。キンマを嗜んでいる。

ちなみにハトムギはモチ性である。東アジアのウビ農耕は炭水化物にデリケートな味覚を発達させ、穀類でモチ性デンプンに対する嗜好を獲得し、その後受け入れた雑穀、麦、トウモロコシについてもモチ性品種を祭事に結び付けて大切にした（中尾 1967）。このため、イネ科穀物のイネ、アワ、キビ、モロコシ、ハトムギ、オオムギ、トウモロコシにはモチ性品種が多くあり（阪本 1988）、ごく最近ではヒエにさえモチ性品種が作られている。

チャ *Tea sinensis* は焼畑作業に耐えて、容易に地下から再生する。このため、野生利用が身近になり、その後の栽培化へと向かい、日本に至って近世の華やかなお茶文化を築いたのだろう。*T. assamica* から作る紅茶は半発酵させる製法も異なるが、イギリスはじめヨーロッパ諸国で、やはり華やかな嗜好生活につながった。

6) ミゾラム州

ミゾラム州はバングラデシュとビルマに国境を接している。魅惑的、高温多湿、濃緑の山がちで深い溪谷が多く、平地は少ない。森林は次の3タイプがあり、①熱帯湿潤常緑林は密に喬木が生育し、②熱帯半常緑林は優占種に落葉樹を含み、標高が上がると、③山地亜熱帯林になる。さらに、焼畑などの生物的影響を受けた森林もある。

25 年と 50 年の間隔で、竹林はすべてが開花して惨事が起こる。タケの花や種子はネ

ズミに食べられ、彼らは驚く程の数で繁殖する。丘陵中の作物を食害し、25 年ごとの短期飢饉 thintam、50 年ごとの大飢饉 mautam に至らせる。近年では 1959 年に大飢饉、1983 年に短期飢饉があった。焼畑は森林に悪影響を及ぼす。ミゾラム州では人口の三分の二、約 5 万家族が焼畑に暮らしを依拠している。毎年、4 万 ha の森林を使用している。ダレスワリ、カーナプリおよびコロダインの 3 川があるが、水量はモンスーンで供給され、寒い気象で乾きあがる。

シャン族に関連するミゾ（ルシャイ）族の人々は比較的新しくインドに到達したグループ（Lushais、Hmars、Pawis）である。1871 年に茶のプランテーションを始めた。イギリスの支配下で、1892 年頃には安定し、居住する部族は 95% がキリスト教徒である。インド独立後、連邦直轄領になった。1959 年には大規模な飢饉が起こったが、インド中央政府から効果的支援が得られなかったため、ミゾ飢饉戦線が生まれ、分離独立運動を起こした。1975 年に和平協定が出来て、1987 年に州になった。

ミゾ族はアニミズムであったが、キリスト教プロテスタント長老派に改宗した。チャクマ族はモンゴロイド仏教徒であるが、ミゾラム州にも居住している。1901 年のセンサスでは、人口 8.2 万人、1981 年には 49.3 万人にまで増加している。ほとんどが指定部族である。

焼畑の面積は家族の農業従事者数によるが、1.5～3ha である。場所決めは 11～12 月、伐採は 1～2 月、よく乾燥したら、3 月後半、最初の降雨を待って焼く。出作り小屋を用意する。焼畑には混合した種子を播く。イネが主であるが、他にトウモロコシ、キュウリ、マメ類、ショウガ、カラシ、ゴマ、ワタなどを栽培する。雑穀栽培に関しては記述がない。大方は散播するが、一部は地中に播く。4 月の終わりの満月に近い日にイネを播く。イネの品種は早生と主要のもの 2 品種がある。除草は定期的に 9 月まで行う。野菜類は 6～7 月、トウモロコシは 8 月、早生イネは 9 月に収穫する。主要品種は 10 月中旬～12 月中旬に収穫する。野生動物などから作物を守るために、出作り小屋で監視をする。1907 年にはナガ族のテラス栽培から学んで、コムギやジャガイモを導入して、栽培するようになった。果樹園芸では、オレンジ、バナナ、パインナップルなどを試行栽培した後、栽培は顕著に急増した（Ray 1993）。

7) トリプラ州

トリプラ州の面積は 10,49 km²、その 60% が森でおおわれている。人口は約 319 万人で、主要民族はトリプリ族で、大方はチベット・ビルマ語族であり、ヴィシュヌ信仰のヒンドゥ教徒である。この地はインド独立前までは藩王国ティッペラに支配されていた。他の主要グループはクキ族 Kukis（ビルマのシャン族に関係している）、チャクマ族 Chakmas、Moghs、Lusharis、および Riangs など 19 に及ぶ。近隣州のガロ族やカシ族も少数ながら居住している。イギリスの侵攻時には近隣で領地争いが絶えなかった。1947 年以降ベンガル人が移住し、1949 年にインドに加わり、1972 年に州に位置づけられた。各部族の人々は丘陵に住み、すでに多数を占めるベンガル人は溪谷に住んでいる。言語

はトリプリ、ベンガリ、英語、ヒンディが用いられている。バングラデシュからの流入者が多い。

ヒンドゥ教を受け入れ始めたのはトリブラ王朝草創期の 11 世紀で、他の諸民族にその影響が及ぶのは 18 世紀以降であった。このため、本来自然崇拝であったので、ヒンドゥの神々と重ね合わせていくことになった。たとえば、土着のマタイ・カタール神をシヴァ神に、川と水の女神トウイ・マをガンガ女神、稲穂の神マイル・マを豊穡の女神ラクシュミーの神格に当てはめていった。しかしながら、チャクマ族とモグ族は上座部仏教、ルシャイ族はキリスト教（バプティスト教会）を信仰している。ベンガル人はムスリムである。食べ物は一般的なターリで、ダル、サブジ、チャワール（メシ）に魚かマトンカレーが伴っている。

8) マニプル州

マニプル州は丘陵に囲まれ、スイスに比肩されるように美しい州である。平地はメイテイ Meiteis が住み、彼らはヒンドゥ教徒でマニプル語を話している。丘陵には 29 部族が住んでおり、彼らは主にキリスト教徒である。気候は健康的で、寒い冬は 10 月から 2 月、雨季は 5 月から 10 月である。

マニプルはログダク湖周辺の盆地を中心とする藩王国であった。現在の州都インパールは第二次世界大戦中にイギリス軍のビルマ反撃拠点であったので、日本軍のインパール作戦の主要攻撃目標になった。

マニプルはビルマ国境にあるもう一つの前王侯州 **former princely state** であった。人口の 60% を占める Meitheis はチベット・ビルマ語系の人々で、シャン族に関わる。溪谷に居住している。他の 29 グループの人々は大方がクリスチャンで、3 分の 1 は丘陵地に住んでいる。主要なグループは Latha、Konyak、ナガ族 Nagas である。

Manipuris はアラカンやビルマの他の国境において近隣と争ってきた歴史がある。イギリス・ビルマ戦争も部分的にはこうした襲撃に起因している。ビルマは敗北して、1826 年ヤンダボ協定によって、マニプルはイギリスの保護下におかれることを認めた。しばしの平和の後、再び地域紛争が続き、1944 年には、インド国軍と日本軍がインパールを攻撃した。1949 年にインド政府直轄領となり、1974 年には州に位置づけられた。主要民族のメイテイ族はヒンドゥ化し、クキ族やチン族とも近い関係にある。他に隣接州の民族が居住しており、北丘陵にはナガ族、タンクル族も居住している。

9) 北東部諸州の雑穀栽培

北東部諸州の農業の状況は環境条件によって大きく異なり、伝統的な焼畑による移動農耕、現代的な開発プロジェクトによる農業、プランテーションなど、経営形態に相應の多様性がある。

アッサム州はブラマプトラ河の氾濫原にあるので、平地が多く、水田稲作が主要な農業経営である。丘陵地では焼畑における若干の雑穀栽培もある。しかし、ベンガル始めインド各地およびネパールなどからの移民が多く、あまりに多民族が居住するようにな

っており、特定の民族と雑穀の結びつきを見つけることはむずかしい。

アルナーチャール・プラデーシュ州は丘陵地が多く、ヒマラヤ南麓の山地帯にまで広がる。このため政府が定着的農業を推進しているにもかかわらず、丘陵・山地に居住する諸民族の農耕民による焼畑耕作が多い。雑穀 millets は州内各地の焼畑で、一年目と二年目に栽培されている。ここで記述されている雑穀の種は不明であるが、補表 4.3 に示したようにシコクビエについては、モンパ族の呼称があるのでシコクビエであろう。この呼称はインド亜大陸の他地域とは異なっている。ビール醸造用と家畜の飼料用を目的としているが、オネリなどの食用にも供されている。ソバはトウモロコシの裏作に栽培されている。ダッタンソバは薬用・妊婦滋養食用として栽培され、オネリにしている。

メガラヤ州では焼畑でシコクビエを栽培して、サケを醸造している。また、19 世紀になってから、ライシャンがカーシーヒルにおいてカシ族によって二次作物として栽培化され、メシと飼料用に用いられている。中根（1959）はガロ族が焼畑でアワを栽培していたと記しているが、チベット系の民族であるガロ族が実際にアワを持って移住してきたのか、これには疑問が残る。ナガランド州では広義のナガ族の人々が、高野（2009）によれば、焼畑でアワとヒエを栽培していたと記しているが、アワは可能性があるとしても、ヒエはシコクビエのことであろう。また、森田（1984）はイギリスが侵入するまではアワとハトムギを栽培していたと聞きとっている。ハトムギは主要な食材でメシに調理していた。

ミゾラム州やトリプラ州でも焼畑は主要な生業となっているが、イネが主作物で、雑穀栽培については記述が見当たらない。マニプル州は稲作が多い。

北東部諸州では、焼畑の作付体系中において、雑穀栽培が位置づけられているのは丘陵・山地が多いアルナーチャール・プラデーシュ、メガラヤ、ナガランドの諸州であった。シコクビエは西から、ハトムギは南から陸稲とともに、アワは北から南下、それぞれ伝播してきたと考えられる。特例として、ライシャンが二次作物として栽培化されたことは興味深い。平地部の灌漑水田稲作やテラスでの天水田稲作が奨励され、定住農業へと開発が進み、丘陵・山地でも人口圧によって焼畑が規制されるようになり、雑穀栽培が漸減する傾向にあるように窺われる。生業の自由や食料主権、および伝統的な技能や在来品種の継承が今後も望まれる。

文献

Bor, N.L. 1960, *The Grasses of Burma, Ceylon, India, and Pakistan*, Pergamon Press, Oxford, England.

ブルーガイド海外版出版部 1993、インド、実業之日本社、東京。

Das, M.M. 1983, *Peasant Agriculture in Assam*, Inter-India publications, New Delhi, India.

Das, N.K. 1987, *Ethnic Identity, Ethnicity and Social Stratification in North-East India*,

- Inter-India publications, New Delhi, India.
- Discovery Channel 2004, Insight Guides India, APA Publications, London, England.
- Maikhuri, R.K. and A.K. Gangwar 1993, Ethnobiological notes on the Khasi and Garo tribes of Meghalaya, Northeast India, *Economic Botany* 47: 345-359.
- Gopalakrishnan, R. 1994, Arunachal Pradesh - Land and People, Omsons Publications, New Delhi, India.
- Gopalakrishnan, R. 1995, Meghalaya - Land and People, Omsons Publications, New Delhi, India.
- 井上恭子 2008、ナガ、綾部恒雄監修・金基淑編 2008、講座世界の先住民族—ファースト・ピープルズの現在 03 南アジア、弘文堂、東京。
- 金井武 2006、アッサムとインド北東部、旅行人、東京。
- Gupta, P. das Kumar, 1984, Life and Culture of Matrilineal Tribe of Meghalaya, Inter-India Publication, New Delhi, India.
- Kimata, M. and T. Nakagome 1982, Comparative studies on the growth habit and growth pattern of *Coix lacryma-jobi* var. *ma-yuen* and var. *lacryma-jobi*, Gramineae, *Bull. Tokyo Gakugei Univ. Sect VI.* 34:1-10.
- Maps and Agencies 1997, Travel Aide, North Eastern States, Madras, India.
- 水野一晴 2012、神秘の大地、アルナチャル—アッサム・ヒマラヤの自然とチベット人の社会、昭和堂、京都。
- 森田勇造 1984、秘境ナガ高地探検記—日本人の源流を求めて、東京新聞出版局。
- 中尾佐助 1967、農業起源論、森下正明ら編、中央公論社、東京。
- Ray, A. 1993, Mizoram, National Book Trust, New Delhi, India.
- 阪本寧男 1988、雑穀の来た道—ユーラシア民族植物誌、日本放送出版協会、東京。
- Sengupta, S. ed., 1994, Tribal Situation in North-East India, Inter-India Publication, New Delhi, India.
- Shimmi, Y.L.R. 1988, Comparative History of the Nagas – From Ancient Period Till 1926, Inter-India Publications, New Delhi, India.
- Singh, H.B. and R.K. Alora 1972, *Raishan* (*Digitaria* sp.) – a minor millet of the Kashi Hills, India, *Economic Botany* 26:376-380.
- 高野秀行 2009、西南シルクロードは密林に消える、講談社、東京 {2003 年再版}。
- 多良俊照 1998、入門ナガランド—インド北東部と先住民を知るために、社会評論社、東京。